

ぼんかんの整枝について

宮迫一郎*・坂元三好*・石井正徳*

MIYAZAKO, I., SAKAMOTO, M. and ISHII, M.
The Pruning Influence on *Citrus reticulata* Blanco.

ぼんかんは、温州蜜柑に比較して枝梢が細小で、節間が短く旅生するので、小蜜柑によく似ているが、直立性が強く、徒長枝の発生が非常に多く、又頂部優勢性が極めて乱れ易く、その上果実が重いので結果母枝が垂下する特性がある。

以上のような点より、ぼんかんの整枝は他の柑橘類と趣を異にする点が多い。

1. 放任型について 骨格が極めて多く、往々にして地際より主幹の多い多幹型となる場合もあるが、樹型は逆ポーキ状となり、下枝の形成が悪く、且つ枝は繊細で、分岐角度が狭いので樹冠のうつ閉により、ふところ枝が枯れ上り樹冠内部では殆んど結実しない。又風、雨、雪、結実等による枝裂けも多い。

第1表 樹冠容積 (単位m³)

	1	2	3	4	平均
放任型	10.66	5.79	8.89	7.52	8.22
開心型	4.92	5.30	5.54	4.66	5.16
主幹型	5.03	5.94	5.04	4.15	5.04

当場の整枝比較試験(8年生)における樹容積は、放任型が最も大きく、他の開心型、主幹型に比し5%で有意差が認められた。

第2表 着花指数 (1m²当り花数)

	1	2	3	4	平均
放任型	471.2	930.9	456.5	420.1	569.7
開心型	203.9	290.4	156.7	354.5	251.4
主幹型	354.8	330.0	257.2	141.7	270.9

又単位樹容積当りの着花数も放任区が最も多い。

第3表 結果数 (単位個)

	1	2	3	4	平均
放任型	15.5	16.0	30.5	35.0	24.5
開心型	20.0	22.5	36.0	20.0	24.8
主幹型	44.5	47.5	49.5	15.5	39.8

結果数に於ては差を認めなかつた。これに結果率が低いわけだが、多分に生長作用が旺盛なことから、樹冠のうつ閉による樹冠内部の日照不足によるものと考え

られる。このように放任した場合には、次第に樹冠内部の日照不足によるふところ枝の枯れ上りが起るので、骨組を整理すべきものと考えられるが、主枝が芯止りする傾向があるから早期に主枝を決定することができないので、剪去部の切口に癒合等も考慮して、大体5~6年生前後で主枝を決定するのが適当と考えられる。

2. 主幹型について 実際には主幹型で整枝できる個体は稀で、殆んど主幹が立たない。当場の試験成績では、樹容積及び単位樹容積当りの着果数においては放任型に劣るが、開心型との間に差は認められない。収量においては放任、開心型に勝る傾向を示している。

3. 開心型について 鹿児島県の屋久島には黒島みかん合30年生の開心型で、樹高約4mの樹があり、一般に骨組が多く、園主の好みにより取り扱いを誤り、裾枝とふところ枝がないのは惜いが、1本当り毎年150kgの収量をあげている。当場の整枝試験では、開心型は放任型に比し、樹容積、単位樹容積当りの着花数は劣るが、主幹型との間には差を認めない。又収量においては放任型との間に差を認めない。実際、植付けられる苗木は開心型で整枝しなければ将来、裾枝、ふところ枝による収量の増大、及び品質等を考え合せると極めて不利になる。この場合注意を要する点は、主枝の先端は外芽で切り返すことと、幼樹時代に主枝候補の枝の角度を無理せぬ程度に開張するよう誘引することである。従来行なわれた方法は、極めて強く開張するよう誘引されたが、これがために頂部優勢性を攪乱し、徒長枝の発生を促したので、整枝に当つては採用すべき方法ではない。その次は多くなり易い骨組を多くしないことで、これですり傷果が減少し、樹冠内部のうつ閉による側枝の枯れ込みを防ぐ。

側枝を形成する場合は切り返しよりもむしろ放任し、夏梢に結果せしめて、果重により徐々に開張せしめ、その下部より発生する枝を使つて行くのが良い。枝を開張せしめるには果実、枝の重さによるのが最も無難なよい方法である。成樹の樹型としては裾枝をつけた円筒型が予想される。

*鹿児島県果樹試験場